

happy ?

どれだけの人に、読んでもらえるのかわかりませんが、
気の向くままに、ブログを使って、小説を書いてみます。

タイトルは、

“happy?”

では・・・はじまりはじまりー・・・

あるひとつの、悲しい恋愛が終わる時、
あるひとりの【happy】が生まれています。

ひとりの【happy】って？

不思議な話ですけど、【happy】は、人間として生まれているんです。

生んだ親も気付きません。
でも【happy】は、いずれ芽生えるある心を持って、
今日も生まれているんです。

“お疲れ様でしたー。”

美香が働いている某アパレルブランドのお店での
一日の仕事が終わり、店長との終わりのミーティング。

今日は、本社から言われている
日割りの予算を達成できたから、
店長もちょっと元気な声だ。

もう、このお店で働いて3年。

アルバイトで入ってから、毎日のように、
お客様にお店の中で、洋服を薦めている。

最初は、緊張してた接客も、さすがに馴れてきた。
ニコニコ笑うのも、わりと得意になった。

今日は、これから圭介と待ち合わせ。

ご飯と一緒に食べてから、今日、自分の家に帰るか、
圭介の家で泊まるかは、成り行き次第かな。

一応、圭介の家にも、明日着る服ぐらいは、
置いてあるし…。

お店では、ミーティングも終わって明日の準備。
今日、売れた商品を、お店のストックルームから、
棚やハンガーに補充。
乱れてしまっている、棚のカットソーなんかを、
畳みなおして、最後に店長へ

“お疲れ様でしたー。”

お店は、都内の某ファッションビルの中にあるから、
タイムカードを押して、従業員通用口から退出。

出る時に、警備の叔父さんに、
バッグの中をチェックされるけど、
毎日のことだから、バッグを開けてガバッと見せて、
叔父さんが見ている風の決まり事。

たぶん、叔父さんは、絶対に見ていない。

一応、他のお店の商品をパクってないかの
チェックなんだけど、パクったことないし…。

某駅の改札で、圭介を待つ。

圭介とは、高校3年の時から付き合って、もう5年。

今までに、2回別れて、2回やり直した。
今はお互い、仲も良く、マンネリと言えなくもないけど、
圭介は、家族みたいなもんだから、
一緒にいると、やっぱり落ち着くし、
しばらく会わないと、顔が見たくなる。

会社帰りの圭介が改札から出てくる。

圭介が
“お疲れー”って笑ってる。

“今日のご飯は、何食べるー？”
“とりあえず、ブラブラしなから、決めよっか？”

で、イタリアンな洋風居酒屋へ。

“孝ちゃん、早くも結婚だって！できちゃったって！”

圭介から聞いてびっくり！
孝ちゃんって、圭介の大学の時のお友達だけど、
まだ付き合いだして、5か月ぐらいだったはず、

できちゃったとは...孝ちゃん！。

【happy?(01) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

びっくりしたから、ワインも進む・・・。

孝ちゃんも大学を卒業して、今年いわゆる商社に就職したばかりで、
これからなのに・・・
勇気あるなあーって、感心してしまう。

圭介も、いつもよりビールを飲むペースが早いかも・・・

とりあえず孝ちゃんに乾杯！って、何回も乾杯しちゃったし・・・。

なんだろうね？もちろんいい事で、素晴らしいことなんだけど、
自分では、まだまだ考えられないことだから、、気をつけなきゃ！
とりあえず今夜は、もう一回、孝ちゃんに乾杯！

さて・・・

美味しくご飯も食べて、おなかも満足したし、
お酒で少し酔っ払ってきたし、今日は、やっぱり圭介の家に泊まろうっと。

圭介の家に向かう途中、もう一回電車に乗って、電車を降りて、コンビニに立ち寄る。
とりあえずは、明日の朝食べるヨーグルトと、いつまで吸うのかなーって考えている煙草と、
圭介の家で、少しだけ飲み足したいから、ビールを1本買う。

となりのレジで、圭介も、ビールを買っている。あと、煙草とお菓子とプリンも・・・。

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ!](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO!

圭介の家でとりあえず、ビールで乾杯！
圭介がつけたテレビには、お笑いの芸人さん達がいっぱい写ってる。

少し前までは、テレビも全然見なかったけど、
最近は、ちょっと見る。そして、ちょっと面白いとも思う。だから笑う。

明日もお互いに、仕事があるから、
圭介と、順番にシャワーを浴びて、ドライヤーで髪の毛を乾かす。

明日のお店のシフトが、早番だから、早めの時間のアラームを携帯でセットする。
置きっぱなしの保湿クリームを肌に塗って、圭介にキスをする。
そんなに盛り上がっている感じでもないけど・・・でも、圭介が電気を消す。

圭介・・・
一応、避妊は、よろしくね。孝ちゃんにはまだ早いでしょ？って、心で思う。
たぶん・・・圭介だって、わかってる。

【happy?(03) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

美香の携帯のアラームが、鳴っている。

圭介は、まだ、寝ている。

結局、昨日の夜、わりと遅くまで起きていたので、まだ眠いけど・・・

でも、起きなきゃ・・・

ついでだから、圭介も起こす。

二人で、けだるく煙草を吸う。

二人で、笑いながら、ヨーグルトとプリンを食べる。

先に、シャワーを浴びる。

コンタクトを入れる。

簡単に、化粧をする。

圭介の家に置いてあった、服に着替える。

玄関で圭介とキスをする。

一緒に、圭介の家を出る。

一緒に駅まで歩く。

一緒に電車乗る。

圭介より先に、電車を降りるから、

電車の中で、バイバイをする。

“じゃあね圭介。また電話するね！”

電車を降りて、振り返ると・・・

電車の中で一人になった圭介が、自分のバッグの中から、読みかけの本を取り出すのが、見えた。

【happy?(04) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

美香が先に降りてから、圭介は、バッグの中から、読みかけの本を取り出した。

でも、昨日の夜、
成り行きで美香が泊まりにきて、成り行きで、夜も遅くなったから、
まだ、体が眠い気がしている。

本を読んでも、字を見ているだけで、ストーリーが、頭の中に入っていない。

なんとなく、孝について考えてみる。

あいつが、もう父親になるなんてなあって思う。
孝の彼女の響子ちゃんも、二回ぐらい会って、飲んだこともあるけど、
あの子が、母親になることも、わりと信じられないことだ。

すっとした綺麗な顔の子で、たしか美容師かなんかだったと思うけど、
子供が生まれる前に、辞めちゃうんだらうなあって思う。
美容の専門学校も、出てたと思うけど・・・

でも、あの子がなあって思う。

ところで、孝の今の給料で、二人（いや三人？）の生活って、
大丈夫なんだろうか、あいつ？

電車が駅に着いた。圭介は改札を出て、会社まで歩く。

美香が働いているお店の会社とは全然関係ないし、
そんな大きな会社でもないけど、
圭介もアパレルブランドの会社で働いている。

会社自体ができて8年ぐらい、本社の社員も20人足らず。
そんな会社に、圭介は今年就職した。

“おはようございます”

自分たちで朝の掃除をしたあと、圭介が所属している営業部の、
朝のミーティングが始まった。

営業部は、部長を入れても5人。
営業部の部長といっても、部長も今年30歳になったばかりだって言っていた。
見た目も若く、普通に一緒に歩いていたら、たぶん、友達って思われると思う。

そんな部長が

“今月の売り上げ予算に対して、売り上げが全体的に厳しいから、
月末まで、もう少し頑張ってもらいたい”

なんて言う。

この言葉も、入社以来、たぶん、毎月聞いているような……。
だから、厳しいんじゃないかと、売り上げ予算が高すぎるのでは……。？
って思ってる。

たぶん、部長も思ってる。
会社だから、しょうがないんだろうけど……。

ミーティングの後、圭介が担当になっている取引先のお店に、電話してみる。

電話にでた女の子に、

“どうですかー？ 売れてますかー”
って、元気な声で、とりあえず聞いてみる。

あんまり元気じゃない声で、返事が返ってくる。
うーん、ここのお店もちょっと厳しいらしい。

そういえば、
“昔は、アパレルって、めっちゃ売れていたんだよー”って、
別の取引先の社長から聞いたことがある。

“みんな、1店舗の売り上げで、1か月に何千万も売っていたんだから”
って、聞いたことがある。

【happy?(05) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

1 月に何千万って・・・

凄いよなあ・・・

会社の電話が鳴る。

同じ営業の先輩の麻紀さんが、電話を取る。

“圭介、電話、名古屋～”

名古屋のお店からの電話。

名古屋には、会社のブランドの直営店があって、そこのお店からの電話だ。

“もしもし、お電話変わりました～”

“圭介君？ お疲れ！”

今日入ってきた商品、1 点足りないよ”

名古屋店の店長の田辺さんだ。

うちの会社の中では、やり手の店長って言われている人。

わりとミスには厳しい人で、昨日、圭介が送った商品に、送り漏れがあったらしい・・・

“すみません！”

“今日の荷物と一緒に、送ります”

少し、汗するやりとりだ。

その圭介の様子を見て、先輩の麻紀さんが笑って言う。

“またか、お前”って言う。

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしくお願いたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

圭介は、また送り間違いで、怒られているのかって、麻紀が思う。

“しょうがねーなぁー”って呟きながら
麻紀はお菓子の飴を口の中に入れて、パソコンからメールソフトを開く。

なにか対処しなければいけないメールが届いていないのを、確認してから、
今日のスケジュールを、手帳を見てチェックする。

そこで、麻紀の内線電話が鳴りだした。

社長からだ。

麻紀は、口の中の飴をティッシュに包んでごみ箱に捨て、電話を取る。

“ちょっと来てくれ”

社長に呼ばれてしまった。
手帳を持って、上の階にある社長室に行く。

ノックして、社長室の扉を開けると、
そこには、社長と営業部長が、先にソファに座っていた。

“麻紀、ちょっと仙台に言ってきてくれないか？”って社長が言う。

“仙台ですか？”

“そう仙台、お店出しませんかって言われてるから、ちょっと明日から見てきてよ。行ける？”

話を聞くと、昨日、社長のところに、仙台の某ファッションビルの営業さんが来て、
お店を出しませんかって、依頼をしていったらしい。

麻紀の仙台出張が決まった。

とりあえず、牛タンは食べなければって、麻紀は心に思って、部長と一緒に社長室を出た。

階段を降りながら、
“部長は行かないんですか？”って麻紀が聞く。

“俺は、明日、お客さんがこっちに来ちゃうんだよ。仙台行きたかったけどなー。
せっかくだから、仙台に泊ってくる？”

“日帰り出張苦手なんで、泊ってきます”

“あーい、じゃ明日明後日で、言っておいで。明日は、出店依頼の場所見て、明後日はどうしてくる”

“午後過ぎから出社します”

“あーい。では、よろしく。牛タンぐらいは食べといで。男なら風俗行くけど、麻紀は女の子だからなー”

朝の会議で、売上げが厳しいって言っていた部長が、
(1泊2日で、ファッションビルを見に行くというだけの) ゆるゆるスケジュールに、
ごく軽めのセクハラと一緒に、気軽にO.K. をくれた。

ネットで、明日泊るホテル探さなきゃって、麻紀は考えた。

【happy?(07) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、

こちらをクリックで、

モンキーファイブへGO!

麻紀は机に戻り、パソコンでホテルを探す。

“麻紀さん、明日から仙台なんですか？”
部長から聞いたのか、圭介が聞いてくる。

“そう、お店出すかもだっさ”

“へー、いいですね、仙台。行ったことないんですよー”

“遊びじゃないからねー”って、

取りとめもない会話を交わしながら、よさそうなホテルを予約する。

朝から、今日会社に入荷した新商品の検品をしていた生産部の女の子から内線がきて、
今日の入荷商品の確定数量を教えてもらった。

今から、自分たちで、入荷した新商品を、全国の取引先やお店に、発送をする。
いわゆる“送り”である。

昨日、圭介が間違えたのも、この“送り”の時に間違えた。

通常だと、外部の業者に“送り”を委託しているアパレルの会社のほうが多いと思うけど、
麻紀たちの会社は、まだ規模も大きくなく、自分たちで“送り”をしている。

“圭介、今日は間違えるなよ”

“はい、注意します”

部長も含めて、5人で本日の“送り”が始まる。

でも、その間も、取引先なんかから電話がかかってきて、
そのたびに、誰かが手を止めて、電話の対応をする。

そして・・・

まとめて大きな段ボール箱で入荷してきた商品が、
発送用に、どんどん小さな段ボール箱や、袋に詰められて（詰めかえられて）いった。

また、内線が鳴った。

そして、部長がまた社長に呼ばれて、社長室に行く。

部長も大変そうだなーって、麻紀は思った。

【happy?(08) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、

モンキーファイブへGO！

部長が社長に呼ばれてから、10分ぐらいの時間が過ぎた。

また、内線が鳴る。

今度は、麻紀だけではなく、営業全員が社長室に呼ばれた。

“失礼いたします。”と言い、全員で、社長室に入ってみると、

今度は、社長と（営業の）部長だけではなく、経理部長までと一緒にソファに座っている。
部長以外の営業部員全員で、そのソファの近くに立つ。

ソファに座っている3人の、中心にはテーブルがあり、
その上には、1枚のA4の紙が置かれていた。

社長が、その紙を手にとって、同じ営業部員で、麻紀のとなりに立っていた山木に渡す。

“お前の担当だった、新潟の取引先Aがつぶれたぞ”

山木が、じっとその紙を見ている。

麻紀がとなりから、覗き込むと、その紙には、
取引先Aと、その社長が倒産、破産の準備を始めるから、
もう直接の連絡は取らないで下さいという
取引先Aの倒産手続きを始める弁護士事務所からの、会社への通知だった。

そして、経理部長が、取引先Aの現状の売掛金について、話し出した。

その話を聞きながらも、山木はまだ、じっと同じ紙を見ていた。

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

山木は 1 週間前に取引先 A の社長と電話で 話したことを思い出す。

厳しい状況だとは A 社の社長からも聞いていたし、

本当は、毎月の月末には、

先月中に A 社に納品した商品の納品金額請求分を 100% で
支払いをしてもらわなければいけなかったのに・・・

ここの所ずっと、支払いは遅れがちになっていた。

月末の支払い日を過ぎて、山木が電話でお願いして
なんとか支払ってくれる みたいな感じで...

それでも 100% の支払いではないことも多く、
先月末の支払ってもらわなきゃいけない金額は、
まだ 1 円も支払ってもらっていなかったから、
たぶん 未回収の金額も 50 万くらいはあるはずだ。

先週の電話では、

“社長、お店の状況はどうですかー？”と、山木。

“うーん、やっぱり厳しいねー、でも、お金は払うから、
ちょっとだけ、待っててよ”と、社長。

“長い付き合いなんで、いいですよ。待ちますよ。
社長、心、折れないで下さいよ”と、山木。

“当たり前だろっ！ちょっとだけ、支払いを待っててくれ。
今、銀行とも新規融資の件で話しているから”と社長。

思い返してみても、いつもの電話と、そんなに変わりはなかったはずだ。

たぶん、融資が下りなかったことは、想像がつくけど・・・

でも、しかし・・・やってくれちゃったなあ・・・社長。

もう連絡は取れないだろうけど・・・

もう一度、あの社長の声が聞いてみたい気がする。

経理部長の説明だと、売掛金は56万あった。

倒産・破産の手続きをする弁護士事務所に電話をしたら、
裁判所に手続きをする準備には、6ヶ月くらいはかかるらしく、
また、A社の社長は不動産にも、少し手をだしていたらしく、
債務は、たぶん、7千万ぐらいあるんじゃないかという話だった。

たぶん、うちの会社には、もうお金は返ってこないだろうけど、
店頭に残っているうちの商品だけは、送って返してくれるらしい。

(うちの会社の)社長が、山木に状況の説明を求めてきた。

山木は社長に向かって、一生懸命、状況説明をした。

7千万円のなかの、56万円。

だから、しょうがないって、話になるわけではないから・・・。
一生懸命、状況説明をした。

【happy?(10) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ!

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO!

麻紀や圭介たちは、山木を残して、先に社長室を出る。

なんとなく、みんなテンションが低くなっている。

みんな、展示会なんかで、A社の社長には会ったことがあり、面白くて、勢いのある社長だった。

でも、もう、あの人も、そんな風には生きられないのかも・・・

どうするのだろうと考えてしまう。

みんな無言で、

“送り”の続きが始まった。

あまりのらない気分のまま“送り”を続けると、山木も戻ってきた。

圭介も、なんとなく山木に会釈だけして、山木も、やり切れなそうな笑いで、圭介に返事をした。

圭介は、すっきりせず、休憩がてら、喫煙場所に行って、煙草に火をつける。山木も、煙草を吸いに来た。

“山木さん、新潟行くんですか？”

“いやー、こうなっちゃうと、もう行ってもしょうがないから、いかないよ。”

“そうなんですか？社長に怒られました？”

“うん、取引先の状況の変化に気付けなかったことは・・・。
そうはいつでも、たぶん、むこうも気付かせないように話すから、
だれでも気付けなかったとは思うけど・・・”

“そうですね。あの社長どうするんですかね、これから・・・”

“どうするんだろうね、頑張るしかないんだろうけど・・・”

山木は、落ち込んでいる。

圭介も、なんとなく話しかけることがなくなり、携帯電話を手にする。

“取引先がつぶれちゃったよ！”

と、美香にメールを送る。

そのメールが届いた時、美香はお店に立って接客をしていて、美香の携帯電話は、ストックルームに置いてあるバッグの中に入っていた。

-新着メール-

美香の携帯電話に、圭介からのメールが届いたことが表示された。

【happy?(11) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、

モンキーファイブへGO！

美香は、お店のシフトで休憩時間となり、
ファッションビルの従業員休憩室に入る。

従業員休憩室は、ビルの中のいろいろなお店のスタッフが
毎日ここでお昼御飯を食べたり、煙草を吸ったり、
しゃべったり、疲れてグッタリするところだ。

他のお店のスタッフとも 毎日のように、ここで顔を会わせるので、
自然と知り合いも増えていく。

美香も休憩室に入り、他のお店のスタッフ達と、
挨拶や簡単な世間話をしたあとに、
ひとりで空いているパイプ椅子に座った。

携帯電話を開く。
圭介からのメールを見る。
よくわからないけど・・・
圭介が、大変そうだ

“頑張れ！圭介！わからないけど、うまく乗りきれ！”

なんて・・・美香が、圭介にメールを送っていると、
美香の前のパイプ椅子に、陽子が座った。

“お疲れー”互いに挨拶を交わす。

陽子は、美香と同じ会社が運営する別のブランドのお店で働いている。

美香の働いているお店は、わりとシンプルなシルエットで、
ベーシックなカラーをベースとしたブランドなのだが、
陽子の働いているお店は、カラフルで、個性的なシルエットの商品が多い。

なんとなくのイメージとしては、美香のお店はOLを対象としていて、
陽子のお店は、美容や服飾の専門学校生を対象としているような感じである。

だから、陽子は今日も、カラフルで、一見、奇抜？な恰好をしている。
でも、小柄な陽子には、よく似合っていて、可愛い。

“美香ちゃん、明後日の木曜日の夜って、空いてる？”
陽子が聞いてきた。

“予定はないけど・・・なんかあるの？”

“トシ君のイベント行かない？”

トシは、美香と陽子の共通の友達である。
小さな広告代理店で働いている会社員で、月に1回、定期的に
友達同士で、小さめのクラブを借りて、DJイベントをやっている。
以前、陽子とも付き合っていたこともある。

“トシ君のイベントって、テクノ系でしょ？どうしようかなー”

“いいじゃん、なんか集めなきゃいけない人数のノルマもあるみたいだし、
協力してあげようよ。美香ちゃん。前回、あまり人が集まらなかったんだよね。”

美香は、それほど、テクノという音楽のジャンルが得意ではなかった。

規則的にリズムが続き、人の声が入っていない曲が多く、聞いていると
どうしても、人の声の歌が聞きたくなってくる。

クラブでお酒を飲んで聞くと、それなりに楽しく踊れ、気持ちもよくなるのだが、
周りで踊っている人達ほど、気持ちよく、しかも陶酔した感じには、ならないので、
自分の中で、ギャップを感じてしまうのである。

まあ、周りの人たちが、純粹に音楽とお酒だけで
気持ちよく、しかも陶酔しているとは、限らないけど・・・

でも特に予定もないので、美香もなんとなく軽い気持ちで、

“ディスカウント（通常よりも低い金額）で入れるんでしょ？
たまには、行くか～。陽子、一緒に飲もっか！テキーラでもっ”

と言ってみた。

“よし！決定！じゃ、トシ君に伝えとくね！
明後日は、テキーラだね！テキーラナイトだっ！”

陽子が素直に喜んで、笑った。
つられて美香も、笑った。

【happy?(12) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

美香は、携帯電話で時間を見ると、休憩時間が終わりそうだったので、陽子とは、遊びに行く約束をして、お店に戻った。

お店の中は、休憩に行く前よりお客様が増えていて、美香も、急いでお店の中にいるお客様の接客に付く。

仕事の上達って面白いもんで、最初のうちは、お客様と話すことが接客することだと思っていた。

だから、美香は、自分のことまで含めて話し込み、長い時間かけてひとりのお客様と話していたもんだ。

でも、上達してくると、お店の中の全体が見えてくるから、ひとりのお客様と話し込んでいるうちに、他のお客様をほったらかしにしていることに気が付く。

だから、2人のお客様に同時に、接客に付くようになる。もっと、上達してくると、3人のお客様に同時に接客ができるようになる。

いまの美香は、休日にお店が込んでいる時は、たぶん、4～5人同時に接客をしている。

今日は、それほどではないので、周りの状況に目配せしながらも、美香はひとりのお客様と、ニコニコ笑いながら話し込んで、

結果的にはそれが、お客様の複数点数のまとめ買いに導くこととなった。

お客様に、レジでお会計をしてもらったあと、お店の電話が鳴りだした。
レジにいた美香が、そのまま、その電話を取る。

【happy?(13) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

美香が電話をとると、電話の相手は、美香のお店を運営する
本社の営業の佐々木だった。

“今、電話に出ているの、堂園さん？”
堂園とは、美香の名字のこと。

美香は、この佐々木のが、あまり好きではない。
というか・・・お店のスタッフみんなが、佐々木のことをあまり好きではない。

佐々木は、若いくせに、いちいち“頑張ったアピール”をしてくるから、面倒くさい。

例えば、美香のお店で売り切れになった、カットソーがあったとする。
本社に、その商品の（まだどこのお店にも置いていなくて）本社で追加投入用に
ストックしている在庫が、残り5枚あったとする。
同じ日に3店舗で、そのカットソーが売り切れでいて、その5枚を振り分けるとする。
そうすると・・・

美香のお店をA店として、
A店に3枚、B店に1枚、C店に1枚か
A店に2枚、B店に2枚、C店に1枚の振り分け方しか、ないはずだ。

もちろん、売り上げの高い店に、在庫枚数を多くするから、東京都内にある
美香のお店は、売り上げ上位店なので枚数が多くなる。

その振り分け枚数を、電話で教えてもらう時に
佐々木はいちいち、
“頑張ってなんとか、3枚確保したよ！だから、頑張って売ってね！”
とか言うのである。

それを聞くと、美香も他のスタッフも、
“頑張ってなんとなんとか、なに？、ほんとにいちいちアピールしてくるなあ”って思う。

たぶん、パソコンで見て3店舗に振り分ける枚数を自分で決めて、
発送作業をする倉庫に、その振り分け方を、連絡しているだけっぽいのに・・・

電話の向こうで、
”忙しくて！”とか“あー、疲れたよ”って、アピールも凄く多い。

若いのに、ほんと、いちいち面倒くさいって感じなのである。

だから、お店のスタッフたちは、佐々木のことは、みんなで

と呼んでいる。

その、ウザ木が、

“今日、社長が、（美香の働いているお店のあるファッションビルの）総会に
行くなって出て行ったみたいだから、終わったら、
たぶんお店にも顔出すよー”と言った。

総会とは、ファッションビルを運営しているデベロッパー会社が開くもので、
そのファッションビルにお店を出しているテナントの社長を集め、
1年間や半年の状況の報告を行うものである。

その報告内容は、ビル全体での売り上げ状況や入店客数状況から、
どんな広告を出したかとか、ビルの人事体制とか、いろいろありで、
だいたい2時間ぐらいの報告会である。

ファッションビルの中で、お店を継続して運営していくためには、
その総会のような集まりに出ることも、運営会社であるデベロッパーに対しての
ちょっとした政治活動のようなもので、大切にしく、
総会には、ビルの中のほとんどのお店の社長が集まる。

だから、同じ日に別のデベロッパー会社のファッションビルの
総会のような集まりが重なり、2か所で開かれるとなった場合、
そのビルの両方ともにお店を出していると、
社長は、
“これは・・・、もしかして踏み絵？”って、
考えちゃったりもするらしい。

（その場合は、社長はもちろん、力関係で、
売り上げが高いお店があるデベロッパーのほうの集まりに顔を出し、
もう一つのデベロッパーの集まりには、別の人が行くことが多いみたいだが・・・。）

そして、デベロッパー会社によっては、
ホテルの大広間を借りて総会を開いたりもするのだが、
美香のファッションビルの場合、最上階に大きなイベントスペースがあるので、
そこを使って開かれる。

“本当ですか、店長に言っておきます！”

“頼むよ！今からでもお店の中を、もっと綺麗に掃除して、
いつ来るかわからないから、大きな声でみんなが、いらっしやいませーって言い続けて、
トルソー（マネキン）のコーディネートも見直して！いつも以上に接客して！”

美香は・・・

うーん、当然それは全部するけど・・・
なんか、こいつに言われると、うっとうしいなーと思いつつ、

“わかりました！気をつけます！”

と言って佐々木の電話を切り、店長に

“店長！ウザ木が、今日、総会の帰りに社長がお店に寄るって言ってます！”
と伝えた。

ニコニコしていた可愛い店長の顔が、一瞬、ちょっと緊張した顔になったが、
その後・・・

“やっぱりなー”って、店長は少し笑った。

店長は、今日、総会があることは前から知っていたから、予想していたらしい。

そう言われて見てみると、美香は、店長の顔のメイク（お化粧）がいつもより
しっかりと、メイクされているように見えてきた。

たぶん、いつもよりメイクも濃いはずだ・・・さすが、店長だ！
と、美香は思った。

【happy?(14) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、

こちらをクリックで、

モンキーファイブへGO！

ウザ木の電話から、3時間ぐらいしてからだろうか・・・

美香のお店に、美香のお店の社長がやってきた。

もう、社長は60歳過ぎているくらいで、わりと小柄で細身の体型をしている。

髪の毛は、綺麗な、白髪になっている。

そして、いつも優しい香水の香りがするような気がする。

ニコニコしながら、お店に入ってきた。

美香のイメージだと、この社長は、いつもニコニコしていて、

優しいイメージなのだけど、

本社の人たちの、社長への気の使い方を見ていると、

たぶん、怒ったら怖いんだろうなーとは思う。

スタッフ、みんなが社長に頭を下げて、挨拶をする。

社長は、ニコニコして、それに応える。

社長が店長に、ニコニコしながら、

“どうですかー”と聞く。

店長が、

“今月は、売り上げ予算も達成できそうです！”と返事をする。

社長は、

“うんうん”と返事をして、

“では、頑張ってくださいね。”と言って、お店を出て行ってしまった。

いつもより、たぶんメイクに時間をかけてきた店長も、

“はい、頑張ります”と言った後、社長がすぐに、出て行ってしまったので、
メイクに時間をかけたたぶん、呆気なくて、ちょっと、さびしそうに見えた。

-社長のお店訪問完了-である。

わりと、みんな心構えして待っていたのだが、あっという間の完了である。

それはそれで、良いことなのだけど・・・

しばらくして、また、ウザ木から電話があった。

美香は、また、その電話を取ってしまって、心の中で舌打ちをする。

“社長、大丈夫だった？何も言っていなかった？”
ウザ木は、ほんと、こんなことばかり気にしていそうだ。

“大丈夫でした。すぐ出て行っちゃいました。”と美香は言い、
“よかったー”とウザ木は、電話の向こうで安心した。

安心したからか、ウザ木は、そこから、いろいろと話し出したのだが、
早く電話の切りたかった美香は、ほとんど話も聞かず、
ただ・・・“はい”“はい”と、適当に返事をして、やり過ごしていた・・・。

次の日の朝、（圭介と同じ会社で働いている）麻紀は、
東京駅から仙台行きの新幹線に乗る。
新幹線の中で読むつもりで、読みかけの小説を持ってきていたのだが、
朝早かったからか、すぐに寝てしまい、
起きたら、もう仙台駅の手前まで、新幹線は進んでいた。

新幹線が仙台駅に到着して、そこから麻紀はタクシーに乗り、某ファッションビルに向かう。

そのタクシーは、10分ぐらいで到着し、麻紀はお金を払って領収書をもらい、
タクシーを降りて、そのファッションビルの中に入って行く。

このビルの営業さんとは、後ほど、このビルの事務所で会うことになっているのだが、
麻紀は、会う前に、このビルの中の全フロアを一度見ておこうと思い、
入口に置いてある、このビルのフロア案内を手に取り、
エレベーターで、まず最上階まで、上がってみることにした。

最上階まで上がってみると、
（まだ時間が早いからなのか）フロアには、誰一人、お客様は歩いていなかった。

麻紀は、エレベーターを降り、そのフロアを、歩いて一周してみる。

このフロアは、いわゆるロック

(その中でも特にビジュアル系やパンク系)の服を
取り扱っているお店が多らしく、どのお店にも基本的には黒い服が多く置いてある。

また、対照的に、ピンクでレースでフリフリのロリーターファッションのお店もあった。

スタッズやチェーンが付いている服が多い。

カットソーのプリントも、スプレー風や、ペンキ風のプリントが多い。

ドクロのプリントが異常に多い。

ちなみに、ロリータのお店には、イチゴやチェリーが多い。

麻紀は、自分で着るわけじゃないけれど、こういう雰囲気服も嫌いじゃなかった。

そう、自分で着るわけじゃないけれど・・・嫌いではなかった。

【happy?(15) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ!

★携帯電話の場合は、

こちらをクリックで、

モンキーファイブへGO!

麻紀は、エスカレーターを使い下のフロアに降り、
またそのフロアを一周しては、下のフロアに降りて、
地下のフロアまで、ビルの中を、見て回った。

ビルの中を全部見て回ったあと、
麻紀は（社長から聞いてきた）このビルの営業部の電話番号に電話をして、
お目当ての営業さん呼び出してもらう。

その、営業さんが電話に出てくると、到着したことを伝え、営業部の事務所の場所を聞き、
ビルの入り口から出て、反対側にある従業員通用口から再度ビルに入りなおし、
そこから、エレベーターで事務所に到着した。

事務所の中に入ると、初めて顔を見た営業さんと名刺交換をし、
どうぞこちらへと、会議室に案内される。

そして、営業さんと改めて、挨拶を交わし、
本題に入る前に、少し世間話をする。

そして、頃合いを見計らって、営業さんの話が、本題の出店依頼の話となる。
営業さんが、3階のフロア区画の図面を見せ、
“ここの区画で、やってみませんか？”と言う。

通常、ファッションビルの場合、例えば1階とか2階とかの1フロアに、
いくつものお店が出ているが、それは、そのフロアの中から、
通路などを除いて、割り振られたいくつもの区画が先に決められていて、
その区画にいくつものお店が、入るようになっている。

だから、もし、（さまざまな理由で）ある店舗が退店し、
次のお店が入る時は、同じ大きさのお店ができるのである。

つまりは、不動産の土地と同じような感じである。

そして、やってみませんか？と言われた区画は、まだ、さっき見てきた時は、
あるレディースブランドのお店があった。

話を聞くと、そのレディースブランドのお店の売上げが極端に悪いから、
(このビルから) 退店してもらうつもりだと言う。

麻紀は、そのお店の売上げを聞いてみた。
教えてもらった売上げは、確かに悪かった。

そして、そんな悪い売上げのお店があった区画に、
うちのお店をだしても大丈夫なのかなーって、麻紀は少し、心配にもなってきた。

【happy?(16) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

ついつい、麻紀は、提案のあった区画の周りにあるお店の売り上げも聞いてみた。

やっぱり、人気のあるブランドは、売り上げもいい。

今回、提案のあった区画の通路を挟んで、向かいのお店は、最近、ファッション雑誌にも商品がよく載っていて、人気がある。そして、売り上げもいい。

商品のテストは、麻紀の会社の商品とも似ていて、もしかしたら、お客様の買い回りも期待できる。

今ある、売り上げの悪いお店の商品よりは、売れるとは思う。

麻紀は、営業さんに、お店を出す時の（家賃となる）条件を聞いてみた。

だいたい、お店を出す時は、（そのお店の大きさに合わせて変わってくる）保証金を、ファッションビルを運営するデベロッパーに預ける。一応、保証金は、退店する時に、退店時にかかる費用なんかを引かれて、帰ってくる。アパートを借りる時の敷金と同じ様な感じだ。

あとは、売り上げの中から、10%~20%ぐらいを家賃として毎月支払う。もちろん、売り上げが0円だから、0円の家賃というわけにはいかないの、最低保証金額が、デベロッパーより設定される。これが、どんなに売り上げが悪くても、家賃として最低払わなければいけない金額となる。

麻紀が聞いた条件は、だいたい想像の範囲で、なんとなくお店を出した時に予想できる売り上げから考えたら、いい話のような気がした。

麻紀は、念のため、営業さんに、もっと家賃が下がるかどうかを聞いてみた。うーんと言いながらも、営業さんは、ほんの少しだけ、家賃を下げる。

その後も、多少の駆け引きのあと、条件も決まり、麻紀は、
“じゃ、東京帰ったら、（お店を出すかどうかを）社長に聞いてみます。”
と言った。

営業さんは笑いながら、
“お願いいたします”と言い、

“今日は、日帰りですか？”と麻紀に聞いた。

“いえ、今日は、1泊してから、明日帰ります。”と麻紀が言うと、

“もし、夜の予定が無いならば、おいしい牛タンでも、食べにいきませんか？
せっかく仙台まで来ていただいたので、会社の接待費で、ごちそういたしますよ。”

と、営業さんが素敵なことを、言ってくれた。

麻紀は、

“えー、接待されちゃうと、お店を出すこと、断りにくくなるじゃないですかー”
と、言いつつも、

“美味しい牛タン、よろしく願いいたします。”と営業さんに頭を下げた。

【happy?(17) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、

モンキーファイブへGO！

麻紀と営業さんは、営業さんの仕事が終わる、夜の8時半にビルの近くの待ち合わせ場所を決める。

麻紀は、8時半までには、まだ時間があるので、一度、予約していたホテルにチェックインをした。

熱めのシャワーを浴びる。

そしてホテルの中で、少しのくつろいだ後、麻紀は、待ち合わせの場所に向かった。

8時半。

営業さんは、先に来て、待っていた。

“すみません、お待たせいたしました”

“いやいや、時間どうりでしょ？さて、では、美味しい牛タンを食べましょう！”

麻紀は営業さんに連れられて、雑居ビルの地下にある、美味しそうな雰囲気がある居酒屋に入る。

“とりあえず、牛タンですね？”

“はい、お願いいたします。”

ビールで乾杯をすませ、二人で牛タンを（もちろん、他のおつまみも・・・）食べる。

居酒屋で出てきた牛タンは、麻紀が今まで知っていた牛タンとは違い、かなりの厚みがある牛タンで、とても、美味しい牛タンだった。

“美味しいですね！”

“でしょ！”

なんて、話をしながら、二人でお酒を飲む。

麻紀は、営業さんに質問を試みる。

“結婚はされているんですか？”

“してますよー。もう3年位になります。2才の子供もいるんですけど・・・
嫁さんも子供も、大分にいるんで、なかなか会えないんですよ～。”

“じゃ、今って、単身赴任なんですか？”

“そうですそうです。もう、一年半くらい、仙台にひとりでいます。”

“浮気してるでしょー???”

“してないですよ～！。もちろん、したいんですけどね・・・どうです、僕???”

“ははは・・・、とりあえず、お断りいたします。”

“でしょ！もちろん、断られると思ってましたよー。

“言ってから、もしO.Kもらっちゃったら、どうしようかと思いましたよ～”

なんて、会話をしながら、麻紀は、仙台の夜を楽しんだ。

そして、これから、（お店を出すかも知れないビルの）営業さんと麻紀は、
怪しいことはなにもなく、

でも、お店は2件をまわり、夜の2時くらいまで、
二人で楽しくお酒を飲み、麻紀はホテルに戻った。

そして、麻紀はベッドにもぐりこんだ。

【happy?(18) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

翌日、麻紀は、ホテルをチェックアウトして、東京に戻る新幹線に乗り込んだ。

昨日、少し遅くまで飲んでいたからか、自分の席に座ると、すぐに眠り込む。

途中で、ふと目が覚めると、どこかの駅から乗って来たのだろうか。

麻紀の隣には小柄な男の人が座っていた。

たぶん、60歳を過ぎているぐらいだろう。

細身で高級そうなストライプスーツを自然に着こなし、綺麗な白髪で、

どことなく優しそうな雰囲気がある。

そして、優しい香水の香りも……。

麻紀は、となりに座っている男の人が、妙に気になったのだが、

いつのまにか、また眠ってしまい、

次に麻紀の目が覚めた時は、もう新幹線は、東京駅の手前にいた。

そして、麻紀のとなりにいた男の人は、もういなかった。

手前の駅で降りたのだろう。

麻紀は、優しい香水の香りが、まだ、ほんの少し、となりに残っているような気がした。

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ!](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO!

麻紀は、東京駅で新幹線を降りると、そのまま会社に戻る。

会社に着くと、麻紀は自分のデスクの後ろに、荷物を置き、デスクの上に置いてある、いろいろなメモを見る。

それは、麻紀がいない間に、かかってきた電話の相手先と、簡単な用件が書いてあった。営業部のメンバーが、麻紀宛の電話を取って、その都度、メモを残したものだ。

麻紀は、早めに電話しなければいけない取引先に電話した後、営業部長のデスクに行き、仙台の出張報告をした。

麻紀の出張報告を聞いた後、部長は社長に内線をし、そのまま、麻紀と営業部長は、社長室に向かった。

“どうだった？仙台は？”社長が聞く。

麻紀は、先ほど営業部長にした内容と重複するが、もう一度、仙台の状況についての説明をした。

麻紀自体は、仙台の出店については前向きに考えていたので、お店を出す場所の状況や出店契約を交わす際の条件など、前向きに説明をする。

社長は、麻紀の報告を、真剣に聞いた後、

わりと簡単に、

“じゃあ、お店だしてみるか！”と言い、

“麻紀、仙台のビルの営業さんに、
出店を考えたいけど、こっちは東京の会社で、仙台に販売員がないから、
販売代行を受けてくれそうな会社があるかどうかを聞いてみてくれ”

と言った。

販売代行を受けてくれそうな会社とは、
例えば東京の会社が、地方にお店を出したくて、でもその地方の販売スタッフがない時、
また、東京で地方のスタッフを管理することが難しいと考えた時に、
その地方の会社で、販売を代わりに請け負ってくれそうな会社のことである。

その会社は、自分の会社のスタッフで、その、まかされたお店を運営して、お客様に販売をし、
その売り上げの中から、だいたい15%前後の販売代行料を受け取ることとなる。

アパレルの会社は、やっぱり東京に多く、それ以外の地域で、お店を出す時には、
そのような販売代行会社を使う会社も多い。

“わかりました”と麻紀は言い、営業部長と一緒に社長室を出て、
デスクから仙台のビルの営業さんに、電話をした。

電話の向こうに、営業さんが出てくると、麻紀は、まず昨日の食事のお礼をした。

“昨日は、ごちそうさまでした。牛タン、めちゃくちゃ美味しかったです！”

と元気にお礼を言って、麻紀は笑った。

【happy?(20)終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

よろしくお願いたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

営業さんも笑う。

“いえいえ、昨日はお疲れさまでした。もう、東京に戻られたんですね。”

“さっき、戻ったところです。

さっそく、うちの社長と話をしまして、聞いといてくれと言われたんですが・・・
もし、お店を出す場合に、販売員の手配や管理が難しそうなので、
販売代行の会社って、紹介してもらえるんですか？”

“代行会社ですね。

うちのビルの中にも、いくつか、代行会社が販売しているお店がありますので、
よさそうな代行会社に、御社のお店の販売も請けられそうかどうか、ちょっと、聞いておきますよ。
”

“ぜひ、お願いいたします。あと、次回もし、東京来られる時があったら、ぜひ、顔出して下さいね。
社長はもう、会っていると思うんですが、今度、上司の営業部長も紹介します。”

“わかりました。いまのところ、出張の予定はないのですが、もし、東京行く時は連絡します。
でも、その前に、代行会社の感触を聞いて、また、連絡いたしますね。”

“そうですよね。じゃあ、連絡お待ちしていて大丈夫ですか？”

“大丈夫です。早めに連絡しますので・・・”

麻紀は、電話を切ってその内容を、営業部長に伝えた。

営業部長は、報告を聞いた後、

“ところで、昨日の夜は、何食べたの？”
と聞いてきた。

麻紀が、
“向こうの営業さんに、牛タンおごってもらっちゃいました”と答えると・・・

“向こうの営業と牛タン食べただけ？ほんとに？若いのに？”

“食べただけです。他には、なんも、ありません。”

“出張なのに、食べただけ？”

“食べただけです！”

たぶん、営業部長は、少しでも甘いエピソードでもあれば、聞きたかったんだろうが・・・
なにもなかったし、あっても、絶対に報告なんてしないでしょって、麻紀は思った。
あと、この人、いったい、どんな出張をしているんだろう・・・？とも、気になった。

夜になって、麻紀は、昨日出張に出ていた分、
ちょっと溜まってしまった仕事を片付ける残業をしていると、
他のみんなは、自分の仕事に区切りをつけて、どんどん帰って行き、
気が付いたら、麻紀と圭介だけが、会社に残っていた。

麻紀は、
“圭介、そういえば、つぶれちゃったお店の件って、あれから、何かあった？”
と聞いてみた。

その声を聞いて、圭介は、デスクから顔を上げた。

【happy?(21)】 終わり

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

“なんか、あのままみたいですよ。

結局、弁護士が入っちゃってるから、連絡も止められてるし...

ここから、何ヵ月かかけて、ちゃんとした負債の金額を出して、
破産手続きするらしいです。

うちの会社にも、未払い金額を提出してくださいって、
弁護士事務所から、ファックスが来たらしいですよ。”

“なるほどー、たぶん、うちの会社の50万ぐらいの規模だと、
お金は戻ってこないんだろうけど・・・”

“そんなもんなんですかね～”

麻紀は突然、

“圭介！圭介は営業だから、商品は売らなくちゃいけない！
そして、売ったお金は、ちゃんと払ってもらうことを命じる！”
と、わざとらしく敬礼をしながら、圭介に、言ってみた。

圭介も、敬礼をして、

“了解しました。麻紀先輩！今後とも、よろしく願いたします！”
と、言って笑った。

もちろん、麻紀も笑い返し・・・

もう、会社に残ってるのも二人だけで、
時間も遅くなってきて、そして、圭介と麻紀は、二人で笑っていた。

二人は、また仕事をし始め、少しすると、
圭介は、デスクのパソコンを落とし、帰り支度を始める。

それを見て麻紀は、

“圭介、もう帰るの～？”と聞いてきた。

“そろそろ、帰ろうかと...”と圭介が返事をすると、

“ご飯、食べに行かない？、お腹すいたんだよ！”と、麻紀。

“いいっすよ、軽く行きますか？”

“じゃ、私も切り上げるから、ちょっと待ってて”

そして、圭介と麻紀は、会社の近くにある、
深夜まで開いているカフェに、入って行った。

“おつかれー” 圭介と麻紀は、ビールで、乾杯をする。

“麻紀さん 仙台で何食べてきたんですかー？”

“もちろん、牛タンだよ。牛タン。

あっちの牛タンって、こんなに厚いんだよ！”

そう言って麻紀は、指を広げて、
牛タンの厚さを少しオーバーに表現してみた。

“まじっすか？”圭介が、素直にびっくりする。

その、びっくりしている顔を見て、
こいつ、ちょっと可愛いなーって、麻紀は思う。

そして今日、新幹線で隣に座っていた、
優しそうな白髪の人のことを思い出し、
圭介も年取ったら、あんなふうに、優しそうになるのかなーなんて、考えてみた。
そして、麻紀は、新幹線の中の、優しい香りを思い出す。

麻紀は、グラスに入ったビールを飲み干し、新しいビールを注文する。

圭介は、少し酔った顔で、煙草を吸っている。

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ!](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO!

結構、お店にいる時間が長くなった。
もうすぐ、夜中の1時を過ぎている。

麻紀も圭介も、わりと酔っている。

もう、当然だけど・・・電車はなくなっている時間だ。

麻紀が聞く。

“どうしよっか？”

この質問に、圭介はドキドキする。

“えっ？どうしよっかって？”

“圭介、一緒にうちに来る？”

“それって・・・えーっ”

“自分の家に帰る？”

圭介は、思わぬ雰囲気、ドキドキする。

ちょっと、不安な気持ちになる。

でも、圭介も酔っ払っているから、あまり深くは考えられず、覚悟を決める。

“麻紀さんの家に、行きます。”

今度は、麻紀がドキドキする。

家に、誘ったのも、半分冗談みたいなものだったのだが・・・

圭介が、家に泊まるって言っている。

こいつ可愛いし、いいって言えばいいんだけど・・・

一緒の会社で、大丈夫なのかなーって、考えつつも、

麻紀も、酔っ払っているから、深くは考えられない。

まっ、なるようになるか・・・。

麻紀と圭介は、お店を出て、タクシーに乗り、麻紀の家に向かった。

麻紀の家に入ると、圭介は落ち着かなくなった。

麻紀の家は、綺麗なワンルームマンションで、部屋の中も綺麗に掃除されていた。

麻紀は、冷蔵庫からビールを出し、落ち着かない圭介と乾杯をする。

“煙草って、吸ってもいいですか？”

“いいよ。”

麻紀が灰皿を出してくれる。

二人で、少しぎこちない会話した後、

麻紀が、

“圭介、先にシャワー浴びてきたら？そのあと、私もシャワー浴びるから。

で、そのあとで、また飲もうよ！このスウエット、着ていいよ。あと、これタオルと歯ブラシ。”

と言う。

麻紀が、男の子も着れそうな大きめのスウェットとバスタオルと歯ブラシを出して、圭介に渡す。

“はい、じゃあ、すみません。先に、シャワー浴びてきます”
圭介は、シャワーを浴びに、バスルームに行く。

熱めのシャワーを浴びながら、圭介は、ドキドキしていた。

そして、圭介がバスルームに行ったあと、部屋でビールをを飲みながら、
麻紀も、ドキドキしていた。
うーん、私やっちゃったかなー・・・なんて、考えながら。

バスルームからは、シャワーの音が聞こえてくる。

【happy?(23) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしくお願ひいたします。モンキーファイブ!](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、

モンキーファイブへGO!

圭介がシャワーから出てきた。
麻紀から渡されたスウェットを着て・・・。

大きめだけど、やっぱり男の子が着ると
どこか、寸足らずになって 変な感じだ。

続いて、麻紀がシャワーに入る。

圭介は、落ち着かない感じでクッションに座り、
テーブルの上のグラスに入っていたビールに口をつける。

圭介は、あまり麻紀の部屋の中を見回しちゃ悪いような気がして、
そうしないようにと思い、テレビを付けてみる。

テレビの中では 圭介も好きなお笑いタレントが、しゃべっていた。
絶対におもしろいこと 言っているのだろうけど、
圭介の頭の中には 何も入ってこない。

それでも、圭介は じっと テレビの映像を見ていた。

会社の勤務時間中から、ずっとマナーモードにしてあった
圭介の携帯電話が 振動する。

圭介が携帯電話を手にとって見てみると 美香からの電話だった。

圭介は、気分が重くなりながら、電話が終わるのを待ち、
もう、振動もしないように、携帯電話をサイレントモードに切り替える。

そして、ずっと続いていた、麻紀のシャワーの音が止まる。
バスルームの扉が空いて、髪の毛の濡れた麻紀が出てきた。

圭介、寝っちゃってるのかなー？
圭介に電話をしてみたけど、電話に出なかったから、
美香は、圭介にメールを送ることにした。

“寝ちゃってる？明日は陽子ちゃんと イベントで夜遊び決定！楽しんでくるぜい！”

圭介は、翌日の朝に、罪悪感と一緒に、このメールを見た。

【happy?(24) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

朝・・・

圭介と麻紀は、時間差を付け、会社に出勤した。

圭介は、先に会社に着いた麻紀に会うと、まるで何事も無かったように、いつものように、麻紀に挨拶された。

もちろん、圭介も、挨拶し返したのだが、なんとなく照れくさい感じもするし、また、昨日の夜のことが、実は、現実じゃ無かったような気もしてくる。

とりあえず、喫煙所に煙草を吸いに行き、そこで美香に、

“昨日は、早く寝ちゃってたよ。今日は、夜遊びかー。楽しんでおいで！
でも、ナンパされちゃ駄目だよ”

とメールを送る。

美香は、ひとりでお店に出勤した。
通勤中の電車で、圭介からのメールを見る。

“恰好いい人が来たら、わかんないぞ〜！”
とメールを返す。

もちろん、そんな気は、サラサラないはずなのだが・・・

一日の仕事が終わり、
美香もお店の仕事が終わると、メールで待ち合わせしていた陽子を、
従業員通用口を出たところで待つ。

あまり時間もたたず、従業員通用口から、今日も、個性的な服を着こなした陽子が出てきた。

お互いに、
“お疲れーっ！”と挨拶をする。

とりあえず、イベントに行くにはまだ、全然早い時間だったから、
美香と陽子は、食事&飲む為に、途中のカフェに入った。

そのカフェの、暗めの照明の中で飲みながら、
美香は軽い気持ちで、

“陽子ちゃんとトシ君って、昔、なんで別れたの？仲良さそうだったけど・・・”
と聞いてみた。

小さめの声で、陽子が、

“だって・・・あいつ【happy】だったから・・・”と言う。

“happy? 幸せってこと・・・?彼女いたとか、そういうこと?”

“全然違うよ。【happy】は【happy】だよ。本当の名前は、よくわからないけど・・・人だよ、たぶん・・・。いっぱいいるし・・・。うちの会社の社長も、たぶん・・・そのうち、美香の前にも、現れるかもよ。どこかから【happy】が。
ねえ、でも美香ちゃん、この話、もう変えていい?”

美香は、陽子の言っていることの意味が、全然わからなかった。

でも、陽子があまり話を聞かれたくなさそうで、
話題を変えてしまったから、美香は頭の中が?でいっぱいのままだった。

陽子の言う【happy】って、なんだろう・・・?人って・・・?
いっぱいいるって・・・?何のこと・・・?うちの社長・・・?

【happy?(25) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ!

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO!

そのまま、陽子の話題は、もう【happy】から、遠ざかってしまった。
美香は、頭の中に【happy】という言葉の響きだけが、印象的に残ったようだ。

夜も11時半を過ぎたくらいとなり、美香と陽子は、イベントをやっているクラブに向かう。

入口で、受け付けの女の子に自分の名前を伝え、ひとり500円ずつ、安くしてもらい、クラブに入る。

安くなったのは、イベントの主催者達が、自分の知り合いなどで、
入場料を無料にしてあげたい人や、安く（値引き）してあげたい人の名前を事前にリストアップして
受付にリストを渡して置きおき、その人が、クラブに来て受け付けで自分の名前を告げると、
入場料が無料になったり、安くなったりするようになっているから・・・。
陽子がトシに、陽子と美香の名前をリストに入れてもらえるように、頼んでいた。

クラブに入ると、大きなクラブではないけれど、割合、人が多かった。
かなり暗めの照明の中、ガンガンと大きな音で、テクノミュージックが、リズムを刻んでいる。
あちらこちらで、煙草の煙が、ゆらゆらと煙っていた。

陽子と美香は、まず、バーカウンターのところに行き、ビールを注文する。
二人でビールを受け取って、乾杯をする。

“あとで、テキーラ飲まなきゃね！このビール飲んだら、テキーラにしようね！”
陽子が、リズムを聞きながら言う。

“そうだね、今夜は、テキーラナイトだからね！”美香が返事をする。

陽子と美香は二人で飲みながらフロアを歩き、顔を知っている人達を見つけては、ビールで乾杯をする。

“あっ、トシ君達だ！乾杯しておこうよ！”

陽子が、トシを見つけた。

陽子が進んだ行き先を、美香が見てみると、5人で笑いあっているグループがあり、その中に、煙草を吸って笑っているトシがいた。

陽子が先に、トシのグループの輪に入り、みんなで乾杯をしている。

続いて美香も、そのグループの輪の中に入って、乾杯をする。

“美香ちゃん、いらっしゃい。来てくれてありがとね！”

トシが、美香に向かって笑った。

【happy?(26) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO!

"どもどもっ、トシ君久しぶりだね"

美香が返事をする。

トシが美香に、今、まわりにいるメンバーを簡単に紹介をする。
そして今度は、美香のことを、今、まわりにいるメンバーに、簡単な紹介をする。

今紹介された、そのメンバーの中のひとりが、美香に話しかけていた。

"あれっ、美香ちゃんって、美香?"

"そうですけど・・・?"

"俺、俺、高校1年の時、一緒だった結城だよ！っていうか、1年の時で退学しちゃった結城だよ。"

美香は、思い出した。

結城だ。

結城は、高校1年の時に、たしかに美香と同じクラスだった。

その時に印象としては、結城は、わりと悪いタイプで、よく校内でも喧嘩とかで問題を起こしていた。
。

かといって、荒れているという感じではなく、クラスの中では、普通に馴染んでいた。

美香も、外で一緒に遊ぶほどではなかったけど、学校内ではよく話もしていたし、

別に、その存在に気を使った覚えもない。

美香が結城の顔を見るのは、結城が退学して以来だった。

“結城！思いだした！うわーっ、久しぶりすぎる！なんで、ここにいるの？トシ君の友達だったの？”

“そう、トシと友達。美香もなの？”

“そうだよ。結城って今、何やってるの？”

“音楽やりながら、飲み屋でバイトやってる。”

“音楽？DJ？”

“俺は、バンド。わりとパンクバンド。ギターだよ。”

“へー、昔からやってたっけ？”

“高校、辞めちゃってからだね。なんとなく女の子にもてたかったから・・・”

“はははっ。もてるようにねー。もてるようになった？”

“わりとね・・・。今度、ライブおいでよ”

“いいよ、誘ってよ。アドレス交換しとこーよ。”

美香と結城は、お互いの携帯電話で、赤外線通信をする。

“同じ高校だったの？”

そのタイミングで、トシが、ふたりの話に割り込んできた。

【happy?(27) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

“そうだよ！ と言っても、この人 1年で やめちゃったけど”

美香は、そう言って 結城を指差した。

“へーっ、お前、なんで中退したの？”

トシが結城に聞く。

“昔のことだから、あんまり、感情は、覚えてないよ。

でも、たしかあの時、先に喧嘩で停学になって、停学終わって学校行って、しゅーって退学しちゃったんだよなー。もう、いいかな、学校とか思っちゃって”

“凄いね、その感覚。後悔とかした？”

美香は聞いてみた。

“後で、めっちゃ、したよ！ちょっと、ドリンク取ってくる”

結城は、そう言って、バーカウンターの方に行ってしまった。

陽子は、他の三人とじゃれあっているの、
なんとなく、美香はトシと二人で話す雰囲気となっている。

黙っていると気まずくなる感じ、
美香は何か話さなければと思い、
つついトシに、気になっていることを聞いてみた。

“トシ君って【happy】なの？”

それまで穏やかな表情だった
トシの顔が、ほんの一瞬、真顔に変わったような気がしたけど、
すぐに戻り、

“【happy】って？
一応、幸せだよ！” とトシが返してきた。

“違う、違う！
私も、よく、わかんないけど...
さっき、陽子が、トシ君は【happy】だから別れたって、言ってたからさ。
どういうことなの？”

“ふーん、そういうこと。”

そう言って、トシが陽子を見た。

そのトシの目を見た時、

美香は、なんとなくトシに聞いてしまったことを後悔した。

トシが陽子を見る目が、冷たいような気がしたから・・・。

【happy?(28) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、

モンキーファイブへGO！

結城がお酒を持って、帰ってくる。

結城が帰ってきて、自然と、美香とトシの会話も別の会話になる。

その会話に、陽子や他のメンバーも加わる。

陽子が言った。

“そうだ！美香ちゃん、テキーラ飲まなきゃ！飲まなきゃ、テキーラナイトにならないよっ！”

“そうだね！今日はテキーラナイトだもんね”

“テキーラナイトって？”

トシが聞いてくる。

“ただ、みんなで、テキーラ飲むだけ！それが、テキーラナイトだよ。”

“じゃ俺らも、今夜はテキーラナイトしようぜ！”

結城が言う。

結局、みんなで、バーカウンターに行き、7個の小さいショットガラスに、テキーラを注いでもらう。

“せーの！”

結城の掛け声とともに、

みんなで、グラスのテキーラを、一気に飲み干す。

美香は、胸のあたりが熱くなった。

“もう一杯、飲む？”

結城が言う。

“俺、もうすぐ出番だから、行かなきゃ！出番の前に、ちょっと、酔っ払っちゃいそうだ”
タイムテーブルで、もうすぐ、トシのDJの出番らしく、トシが時計を見た後に、どこかに行った。

“じゃあ、残りのメンバーでテキーラ飲もうぜ！テキーラナイトだから！”
結城が言う。結城は、テキーラナイトに楽しくなっているみたいだ。

残されたメンバーで、また、テキーラを一気に飲み干す。

そこで、流れている曲の雰囲気が変わった。

“そろそろ、トシが始まったんじゃない？トシ、見に行こうよ”

陽子が言う。

“見に行っておいでよ！俺ら、まだまだ、テキーラナイトしてるからさ。”

結城が言う。結城は、酔っ払ってきて、テキーラナイトに、はまっちゃっているみたいだ。

他のメンバーを残し、美香と陽子は二人で、DJブースの近くまで、トシを見に行くことにした。

ダンスフロアに入り、美香と陽子は歩く。

トシは、意外と人気があるらしく、トシのDJブースの周りには、人が集まっている。

二人は、その集まりの中に入り、踊った。

美香は踊りながらも、トシの冷たい目のことが、ずっと頭の中から離れず、
どことなく落ち着かない気持ちの中で、近くでDJをしているトシのことを、見続けていた。

【happy?(29) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、

[こちらをクリック](#)で、

モンキーファイブへGO！

美香は、やっぱり、トシに話してしまったことを、陽子に話そうと思った。

圭介のDJが続く中、陽子を誘い、ダンスフロアから離れる。

“どうしたの？表情が暗いよ。”陽子が聞いてくる。

“あのね、さっきトシ君に、トシ君は【happy】なのって、聞いたの。
そしたら、その後、トシ君の顔が、怖くなった気がして・・・。
陽子に聞いたからって、言っちゃってるんだ”

陽子の目が、大きく見開かれた。

陽子が、その後、話し出す。

“そう・・・。でも、たぶん私は大丈夫だと思う。私の標的は、もう終わってるから・・・。
ただ、話したことがばれたことは、怖いけど・・・”

“【happy】って、何なの？標的って？”

“ごめん、やっぱり怖くて、ちょっと今は話せない・・・。”

また、音楽の雰囲気が変わりだした。

トシのDJが終わったようだ。

“トシ君のDJ終わったみたいだね。陽子が言う”

“どうする？”

“私、ちょっと、トシ君と話してきていい？このままにしておくのは、怖いから・・・”
そう言って、陽子はトシを探しに行ってしまった。

残された美香は、行くところが無くなり、結城たちがいたところに、戻る。

結城たちは、まだ、そこにいた。
ただ、みんな、かなり酔っ払っている。
結城たちは、テキーラナイトを、かなり続けていたようだ。

“おう！美香！懐かしいなあ！”
結城が、美香を見つけて、大きな声を出した。

美香は、頭の中では陽子とトシのことが気になりながら、
酔っ払った結城たちと、気のない話をして、陽子を待った。

でもその日、陽子もトシも、もうそこには、戻っては来なかった。

【happy?(30) 終わり】

MONKY 5

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

美香は、結城達と別れ、朝方、家に帰る。

今日のお店への出勤は、遅番だったから、
まだ、何時間か眠れる時間がある。

なにがなんだかわからない、
でも【happy】の怖さへの疲れと、お酒の酔いで、美香は泥のように眠る。

美香が深い眠りについた後、朝の7時ぐらいだっただろう。
美香の携帯電話が鳴った。

ただ、美香は深い眠りについてしまった後で、
その電話の音では、起きれなかった。

美香の携帯電話の着信履歴に、
電話をかけてきた相手の名前が残る。

-陽子-

美香の着信履歴に、陽子の名前が残った。

【happy?(31) 終わり】

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！

美香は、お店への出勤のために起きる。

起きて、携帯電話を見てみると、陽子の携帯電話から着信があったことを知る。

陽子の名前を見て、安心はしたけど、出勤前で時間がなく、美香はそのまま、お店に出勤をする。

遅番の美香がお店に行くと、陽子が働いているお店の店長から美香宛てに
-折り返し電話をして下さい-との伝言があった。

同じ会社のお店なので、電話の連絡は、たまにあることなのだが・・・
でも、なんか変な感じである。

美香は、変な胸騒ぎを覚えながら、折り返しの電話をする。

そして・・・

美香は、今日の朝から、陽子がお店に来ていないことを聞き、
また、昨日一緒に遊ぶと聞いていたけど、何かあったのかと、聞かれた。

ただ、陽子が出勤していない理由は、美香にはわからないことなので、
美香としては、昨日の夜にはぐれたこと、
そして朝、寝ている時に、陽子の携帯電話から、着信があったことだけを伝えた。

“どうしたんだろう、陽子・・・”
その電話を切って、美香は、胸騒ぎを覚えたまま、携帯電話を使って、
陽子に電話をしてみた。

電話は、鳴り続けたが、陽子は電話に出なかった。
美香の胸騒ぎが、より強くなった。

【happy?(32) 終わり】

MONKY 5

[↑↑↑](#)

[よろしく願いいたします。モンキーファイブ！](#)

★携帯電話の場合は、
[こちらをクリック](#)で、
モンキーファイブへGO！

happy?(33)

美香は トシの連絡先を知らない。

落ち着かない気持ちのまま、お店に立ち、美香の休憩時間となった。

美香は、昨日番号を聞いたばかりの、
結城の携帯電話に電話をしてみることにした。

“もしもし”
まだ、寝起きっぽい声で、
そして、美香からの電話にすこしびっくりした感じで、
結城が電話に出た。

美香は、昨日の夜の話を簡単に話し、
陽子が、まだ出勤していないことを話す。

ただ・・・話がよくわからなくなりそうなので、
【happy】についての話は省略して...

結城は、トシに連絡してみて、また電話すると言って、
その電話を切った。

だいたい20分ぐらい過ぎた頃、
美香の携帯電話に結城から連絡がある。

何度か連絡してみたけど、トシも電話に出ないと言う。

美香は、引き続きで電話をかけてもらい、

もし、トシに連絡が取れたら美香にも電話をもらうことにして、
結城の電話を切る。

美香は、気持ちが落ち着かないままで、
ちょっとでも、圭介の声が聞きたくなる。

美香は、圭介も仕事だだとわかってはいたけど、圭介に電話を試みる。

(別の意味で落ち着かない) 圭介が、その電話に出た。

【happy?(33) 終わり】

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ!

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO!

"美香・・・俺、今、工作中だけど・・・どうしたの?"

圭介は、麻紀との事があったから、
しかも、美香が工作中に電話してくるなんて、なにかがばれたのかと思って、落ち着かない。
そわそわした感じで、話し出した。

ただ、美香は美香で、陽子のことで頭がいっぱいになっているから、
圭介の変な感じには、全く気付かない。

"ごめんね、工作中なのに・・・今、少し話せる?"

"だっ、大丈夫だよ。どうしたの?"

美香は、昨日の夜にあったことから、陽子に連絡が取れないことまでを、圭介に話し出した。
【happy】についても・・・。

ただ・・・変な心配だけはかけたくないと思ったから、
結城についてだけは、美香は話さなかった。

圭介は、話を聞きながら、何もばれていないことがわかり、
少し、心が落ち着いていく。
ただ、美香が話す内容も、どこか気になる・・・。

"どうしたんだろうね。陽子ちゃん。
陽子ちゃんって、ちょっと個性的な恰好した、小さい子でしょ?"

前に、一緒に飲んだことのある・・・。
しかし、【happy】って、なんなんだ？”

“そう・・・あの陽子だけど・・・。
昨日から、【happy】って意味が全然わかんなくて・・・。
だから、落ち着かなくなって・・・、
圭介の声が聞きたくなかった。
仕事にごめん・・・”

“そうか・・・”
圭介は、返事をする。

“でも、今の話だと、まだ何かが起こっているわけじゃないし、
陽子ちゃんからの連絡を、ちょっと待ってみるしかないよ。
美香、落ち着いてね。大丈夫だよ。何も起こってないよ。”

圭介が言う。

“そうだよね・・・待っているしかないよね。
ごめんね、仕事中に・・・電話切るね。じゃあね。”

“じゃあね”

そう言って、圭介と美香は電話を切る。

美香は、電話を切ってから、お店に戻る準備をする。
圭介は、電話を切って、大きく息を吐いた。

そして・・・

美香と電話で話し、電話を切った圭介のことを、
麻紀が、自分のデスクに座りながら、ずっと見ていた・・・。

MONKY 5

↑↑↑

よろしく願いいたします。モンキーファイブ！

★携帯電話の場合は、
こちらをクリックで、
モンキーファイブへGO！